



外山尚之 著
『ポピュリズム大陸 南米』

日本経済新聞出版 2023年 314ページ

ISBN 978-4296113460

中南米における左翼政権の誕生がピンクタイドと呼ばれたのは2000年代である。「21世紀の社会主義」を掲げたベネズエラのチャベス大統領を筆頭に、ブラジルやボリビアなど多くの国で左派政権が誕生した。しかし、これらの政権は汚職や経済政策の失敗により求心力を失い、2010年代になると右傾化への揺り戻しが起こった。ところが2020年代に再び左派政権の誕生が相次ぎ、ピンクタイドが再来しているかのようなようである。本書は、このように変化が著しい南米諸国の最近の政治情勢をまとめたものである。

まず第1章でベネズエラを取り上げ、チャベスからマドゥロへの政権の移行、その後の経済危機と国民の国外流出、グアイド暫定政権誕生の背景をまとめている。第2章では左右に揺れ動くアルゼンチンについて、豊かな国がなぜ経済破綻したのか歴史を振り返りながらひもとき、疲弊した経済の立て直しを期待されたマクリ政権が思うような政策を打ち出せなかった理由を説明している。第3章ではブラジルについて、ルーラとボルソナロを対比させながらそれぞれの政権が抱える課題を指摘している。第4章では、チリ、コロンビア、ペルー、ボリビアにおける右派から左派への政権交代が報告されている。最後の第5章において、南米の新たな左傾化の根底には「格差への怒り」があり、その怒りを扇動して得票につなげるのがポピュリズムの手法であると指摘している。そして、格差が広がりつつある日本にはポピュリズムが浸透する土壌があり、本書で描かれた問題は対岸の火事ではないと警告して、本書を締めくくっている。

目まぐるしく変化する政治情勢を一冊にまとめたあげた筆力に感嘆する。マクロな流れの説明とインタビューとのバランスがよく、状況が立体的に浮かび上がるような記述となっている。ただし、本書で諸悪の根源とされるポピュリズムについて、経済的な大衆迎合主義をポピュリズムの特徴ととらえていいのか疑問が残る。政治的には既存勢力への対抗という側面もあることを踏まえてほしかった。歴史的にみれば、政治が一部のエリートのものであった20世紀前半のラテンアメリカにおいて、排除されてきた人々に初めて目を向けて社会変革を目指したのが、ポピュリズム政権だった。こうした議論のきっかけになるという意味でも、中南米政治に関心をもつ人にとって必読の良書である。

柴田修子（しばた・のぶこ／同志社大学）